

書評 Robert Jervis著

荒木義修・泉川泰博・井手弘子・柿崎正樹・

佐伯康子・酒井英一・高杉忠明訳

『複雑性と国際政治——相互連関と意図されざる結果』

(ブレーン出版、二〇〇八年)

飯倉 章(城西国際大学国際人文学部教授)

本書は、Robert Jervis, *System Effects: Complexity in Political and Social Life* (Princeton, N. J.: Princeton University Press, 1997)の全訳である。本書の原著者ロバート・ジャーヴィスは、国際関係学研究所の泰斗の一人である。アメリカの国際関係学研究者を対象とした二〇〇五年発表の調査で、研究者自身の研究や国際関係に関する考え方にもっとも多大な影響を与えた学者として、ジャーヴィスは三位にランキングされている。このことが示しているように、ジャーヴィスは研究者にとって無視できない重要な存在である。その理由としては、国際政治における認識と誤認という心理学的アプローチの分野を切り開いたことが大きい。その意味で、本書の訳者代表である荒木義修氏が、最初に国際政治理論研究の古典の一つとも言うべき *Perception*

*and Misperception in International Politics* (Princeton, N. J.: Princeton University Press, 1976)の翻訳を本人に打診したというのにも頷けることである。その申し出が本書『複雑性と国際政治』の翻訳に結びついた経緯は、荒木氏の「はしがき」に譲るが、いずれにしても、本書には認識と誤認をめぐる知見を始めとするジャーヴィスのこれまでの研究成果もふんだんに盛り込まれている。ただ本書の最大の特徴は、自然科学から発展し社会科学へと広がりを見せてきた複雑系 (Complex system) の理論を、国際政治に取り込もうとしていることである。このような大家の野心作を全訳で読めることは、価値あることと言えるだろう。

この書評では、まずはジャーヴィスが複雑系の理論のどの部分を国際政治学に取り入れたか、他の試みにも簡単に触れながら明らかにする。ついで、どのように複雑系の考えを国際政治の理論に取り込んだかを概説し、さらにどのような示唆を本書は与えてくれるかにも若干触れたい。

まず、ジャーヴィスは複雑系の理論の何を取り入れ、また何を取り入れなかったかのだろうか。それを確定するのは、必ずしも容易なことではない。というのは複雑系の理論自体が自然科学から社会科学に至るまで多様で、複雑系の統一された定義すらない状態であるからである。ただし、

大まかなことは言えるので、まずはジャーヴィスが明らかに取り入れなかったものを見よう。一般に複雑系と言うときに思い浮かぶのは、バタフライ効果で有名なカオス系である。蝶の羽ばたきが一定期間を経て地球の裏側で嵐をもたらすという例え話は有名である。ジャーヴィスはバタフライ効果に触れていないわけではないが、例として用いている程度であり、カオス系に注意は払っていない。一方、非線形系についてはシステムの特徴として受け入れているが、それだけを中心としているのではない。

ジャーヴィスの考えはむしろ複雑適応系(CAS:Complex adaptive system)の議論に近い。少なくともその諸々の前提となる特質を受け入れて議論は進められている。すなわちシステムが複数の相互関連した構成要素から成り、それらが経験から学び変化する適応力を持ち、個々の構成要素にはないシステムの特性としての創発性を持つといった考え方である。しかし、複雑適応系の研究に彼の研究が含まれるかと言えば、それはノーであろう。複雑適応系研究は確かに経済学や政治学さらに国際政治学でもなされている。たとえば政治学ではロバート・アクセルロッドらが「繰り返し囚人のジレンマ」や「社会規範」「協力」についての複雑系モデルの研究を実施している。コンピュータのシミュ

レーションに基づくこれらのモデルは、コンピュータ科学の飛躍的發展とともに目覚しく進歩した。しかし、同じ複雑系を論じながらもジャーヴィスはそれらの研究成果を取り入れてはいない。それは無理からぬことと考える。本書は個々の個別的な仮説の科学的立証とか限定的なモデルの提示を試みたものではない。むしろ、複雑性ゆえにシステム効果をもつ国際システムを豊富な事例を用いて描き出すことによって、我々の国際システム観、あるいは国際政治観に変更を迫るものである。次には複雑系の理論がどのように国際政治学に取り入れられているかを各章ごとに見てみよう。

本書では、まず第一章で複雑系の定義とその特性である創発性と相互関連性が説明される。次いで第二章では、システム効果の特性として、重要な副次的な効果が生まれる場合やシステムにおける相互作用自体の特性が明らかにされている。これらの二つの章では、国際政治の事例も用いてはいるが、複雑系の説明のため自然現象や社会現象の例も多く用いられている。ここでの議論は、一見すると不可知論的である。たとえば、相互作用の特性として、個々の行動から結果を予測することはできず、しかもあるアクターの戦略は他者の戦略によって決まり、さらにアクターの行

動はそれ自体が作用する環境を変化させる。また行動は環境を変えるが、環境もまたアクターに影響を与える。従って、往々にして意図せざる結果が生まれることになる。おまけに、この繰り返しは際限がない。さらに、このようなシステム効果を認識しているか否かで、アクターの行動も変化しうるし、それを分析する研究者も複雑性を意識した分析をしなければならぬだろう。二章までは、この先どうなるのだらうと思わせるものがある。第三章以降では、国際政治理論に即して複雑系が語られる。理解の取っかかりとなるのは、国際システムである。複雑系が注目を集める以前から、国際政治学では国際システムを問題としてきた。そのなかでも代表格は一九七九年に出版されたケネス・ウォルツの『国際政治の理論』(*Theory of International Politics*)である。同書でウォルツは、国際システムがいかにか個々のアクター(国家)の行動を強く拘束するかを描いた。第三章で、ジャーヴィスが国際政治のシステムの理論を論じる際に、ウォルツを中心として取り上げているのも、首肯できることである。というのもジャーヴィス自身が述べているように、その理論は国際政治理論のなかで「もっともシステミック」であり、還元主義(国際システムの構成要素を分析することによりシステムの振る舞いを理解でき

るとする立場)を批判し、複雑系に似ているからである。続く第四章では、正負のフィードバックが国際政治の諸理論の説明に用いられる。フィードバックは複雑系においてしばしば見られる特徴の一つであるが、負のそれがバランス・オヴ・パワーとの類似性で語られ、正のそれがドミノ理論やスパイラル・モデルと条件付きながらも関連付けられる様は刺激的で興味深い。第五章では、交渉や同盟関係にシステム効果がどう働くかが検討される。相互連関の視点から、同盟関係では第三国の役割にスポットライトが当てられ、ピボットの立場が重視される。二国間関係に主体を置く同盟分析に慣れきった私目には、このような分析は新鮮だった。また構造の影響が検討され、国家のニーズと提携の選択肢に影響は与えるものの、構造が決定的というわけではないとされる。第六章ではシステムの均衡(一貫性)と不均衡の問題が論じられる。ジャーヴィスは多くの社会システムが時を経て一貫性を持つことに着目し、国々が他国を支配するとか滅ぼそうとするときほど、同盟力学が活性化し、国際システムが一貫性を持つ傾向があると指摘する。第七章では、システム内での行為の問題が論じられる。システム効果は、それを意識した人間の行為によってさらに複雑性を帯びる。しかし政策決定者がシステム効

果をどうしようもできないということではない。ジャーヴィスはその処方箋として、選択肢の事前削除や相互連関性の分断によりシステムに制約を課すること、システム効果の予測と相殺、間接効果を逆に利用すること、複数の包括的政策の実施などを挙げている。懸念された不可知論も、ある程度克服されたと見るべきであろう。

それでは、国際政治の力学を知る上でどのような示唆を本書は与えてくれるだろうか。まずは政策決定者のみならず研究者もシステムの考えることの重要性を意識せざるをえないであろう。歴史において原因と結果を単純な因果関係に帰することができないことは、注意深い研究者なら承知していることであるが、豊富な歴史的事例によって裏付けられた様々なシステム効果を知ることによって、新しい知見が得られることも期待できる。また本書は、国際政治に関する箴言に満ち溢れている。たとえシステム効果に疑問があるとしても、歴史的事象を援用した個別のメカニズムや理論の説明から得るところは大であると思われる。本書でジャーヴィスはしばしば「よくは分らないが」と断りを入れ、不明確でありながらも、さまざまな理論や事象を取り上げている。それにより、本書がよりインパクトを持つものとなったのは間違いない。最初に触れたように、

ジャーヴィスが研究者にとって無視できない存在であるのは、このような知的な刺激に満ちた議論のためであろう。大家の挑戦に脱帽である。

最後に本書の翻訳について若干触れたい。私も翻訳をするので天に向かって唾をするようなことであるが、翻訳にはもう少し工夫をされたらと思われる箇所が所々あった。しかし、そのことが詳細な注を含めて全訳された本書の意義を損ねることはないと思う。難解な理論と豊富な歴史的事例を盛り込んだ著作を限られた時間のなかで翻訳する作業は、並大抵のことではなかったであろうし、この翻訳によって原書では理解できなかった部分が明快になったことが幾度となくあった。翻訳に当たられた方々のご努力に敬意を表したい。